歴史地震
第30号(2015) 200頁

［講演要旨］

明応地震津波に関する東海地域での現地調査結果について(その3)

久永哲也(1)・内田篤貴(1)・浦谷裕明(2)・小川典芳(2)・武村雅之(3)・都築充雄(3)

(1)日本物理探鑛株式会社 (2)中部電力株式会社 (3)名古屋大学減災連携研究センター

§1. はじめに

1498 年明応地震は，津波による被害の記述が比較的多く残されている．本研究は，既報告(その1，その 2)に引き続き明応地震の津波被害について，現地調査を実施した結果を報告するものである．

§2. 経過報告

①浜名湖周辺(角避比古神社，細江神社，若御子神社)

静岡県浜名湖周辺では，明応 7(1498)年 8 月 25 日の地震津波の他，その前後の地震・高潮・暴風雨等の被害記事が今切の形成に関わる記事も含めて多く存在している．

既報(その2)では，「角避比古神社(つのさくひこじんじゃ)由来記」をもとに，今切が形成されたのは，1498 年明応地震だけが原因ではなく，その前後の数度にわたる災害により形成されたとする説を示した．この角避比古神社については，かつて湖口附近に鎮座していたが，明応年間の地震津波により，ご神体が流されたと伝えられている(「細江神社旧記」など)．

角避比古神社のご神体が流れついたと伝えられている神社としては，細江神社，若御子神社がある．両神社とも湖口附近ではなく，浜名湖の奥に鎮座している．

細江神社は，「細江神社旧記」に，「明応七年八月二十五日の大海嘯に地形変じて裏海となり，当時浜名に御鎮座の角避比古の神璽，村越(現今の村櫛)，内山と転々として沿岸に御漂着，越えて伊福の郷字伊目十三本松に漂流着御，(中略)其後再び大海嘯の厄にあい，永正七庚午年八月二十七日，伊福の郷字吉村赤池に着御す．」とあり，明応 7(1498)年 8 月 25 日と永正 7(1510)年 8 月 27 日の大海嘯により角避比古神社のご神体が流れ着いたことが，記録されている．

若御子神社は，境内に掲げられた由緒に，「角避彦神(中略)明応八年六月十二日の大異変に大怒濤起り湖口滄海と変りました万物或は没し或は流され(中略)御神宝と崇め奉る宮船は字中島の七兵衛海岸にお着になりました(中略)間もまなく氏神若一王子社へ奉遷申上以来氏子一同崇敬して現在に至つたので御座います(後略)」とあり，日付が上記と異なり，明応 8(1499)年 6 月 12 日とされていることも興味深い．現在は，古人見を見下ろす高台に鎮座している．

②明応地震の日付について

浜名湖付近において，今切が形成されたと考えられる明応から永正年間の災害の発生日を整理すると，地震・津波に関しては，明応 7(1498)年 8 月 25 日(「東榮鑑」，「松山記」，「細江神社旧記」など)，明応 8(1499)年 6 月 10 日(「編年小史」・「本朝通紀」・「大和本草」など)，永正 7(1510)年 8 月 27 日(「皇年代略記」・「足利季世記」・「高代寺日記」など)等の年月が度々現れ，また，高潮・暴風雨の災害を記述するものも多い．このように，今切の形成との関連が考えられる災害について，明応 7(1498)年 8 月 25 日に加え，明応 8(1499)年 6 月 10 日，永正 7(1510)年 8 月 27 日といった，複数の日付が記録されている．なお，若御子神社由緒のように明応 8(1499)年 6 月 12 日との日付もある．

一方，既報(その2)では，三重県の安濃津について，大きな被害を伴った明応年間の地震の発生日は，一般に知られている明応 7(1498)年 8 月 25 日ではなく，明応 7(1498)年 6 月 11 日とする史料が多く残されている点について整理して報告したが，浜名湖周辺では，明応 7(1498)年 6 月 11 日の災害記事(「続史愚抄」)は少ない．浜名湖から比較的近い西側の愛知県豊橋市にある素盞嗚神社では，地震津波による流失被害の日付が，明応 7(1498)年 6 月とされている(「三河国牟呂吉田村盞嗚神社由緒」)．なお，「日本被害地震総覧 599-2012」でもこの点ついて整理されている．

③渥美(常光寺)

常光寺には，既報告(その1)で示したように，開基から代々書き継いだ，「常光寺年代記」という記録が残されており，明応地震による広域の概略的被害の他，宝永・安政地震による常光寺周辺の被害が記されているが，常光寺自身の被害は記述されていない．その一方で常光寺は宝永地震津波の被害により，高地(現在地)に移転したとされていることから，今回，常光寺の移転について調査した．

渡辺崋山による渥美半島の紀行文「参海雑志」(天保 4(1833)年)には，「常光寺は(中略)此寺七年前いたりし時ハ南浜にありしが，年々浜かけ入て永く住しがたきよしにて，去年此地にうつりしなり．(後略)」とあり，天保 3(1832)年に南浜(地名か南の浜辺かは不明)から現在地に移ったことが記され，移転の原因が津波ではなく，海岸侵食に起因したことがわかる．

§3. 終わりに

東海地域における明応地震の現地調査結果を報告した．今後，更に調査を進め，明応地震津波の全体像について総合的な検討を行っていく．なお，鎌倉では明応 4 年の地震津波被害が知られており，明応年間の地震像検討のため，この点についても検討していきたい．